

5 設計者・工務店に求められる対応

この事業を通じて配慮してほしい大切なポイントは次のとおりです。

1. 計画時のポイント

単に手すりを設置するといっても、どの位置にどの高さにどのような形のどのような材質のどのような色の手すりを設置するのが、どのような壁補強をするのかを説明してください。手すりの設置一つをとってみても身体状況により一人ひとり違います。標準的な一律の技術基準だけでは限界があり対応しきれません。計画にあたって疑問な点や不明な点は、介護や医療福祉の専門家に相談することが効果的です。より多くの情報を得ることにより同じ工事費で最大限効果を発揮する工夫が生まれます。

- ① 施主から想像つかないような注文が飛び出しますが、施主の話をよく聴き、言わんとする内容の把握に努める。
- ② 話の中には住宅改修と直接関係ないと思われることもあるが、計画を進める中で、初めは関係ないと思われていたことも重要なポイントであったりすることもある。
- ③ あいまいな点は理解するまで何度でも確認する。
- ④ 生活のニーズを的確に整理する。
- ⑤ 家族構成や主に介助する人は誰か、さらには高齢者の趣味や福祉サービスの活用の有無などを具体的に把握する。
- ⑥ 話の内容は記録にとどめる。一方で重要なポイントが欠落することがあり、施主の話を整理しながら対応する。
- ⑦ 住宅改修の方針決定はあくまでも施主にあるが、介護や医療福祉の専門家を交えて、より多くの情報交換に努める。
- ⑧ 施主が方針を定める際に考えられるプランをいくつか挙げ、それぞれの特長、長所、短所を丁寧に説明して、工事内容、仕様、金額を明確にする。

2. 施工時のポイント

高齢者の心身の状況、日常生活動作、身体機能の低下など、特に入浴動作・排泄動作・屋内外の出入り動作などは、実際に動作を示してもらいながら、分からないことを分からないままにしないで医療福祉の専門家に相談してください。これらを省略すると後に施主との行き違いが生じる場合もあります。

- ① 建築の専門用語は高齢者、家族には馴染みがありません。建築を知らない人にも理解できる言葉で説明する。
- ② 施主が工事内容を十分に理解していることを確認しながら打ち合わせをする。
- ③ 高齢者が気苦労しないよう短期間で工事を終了させる配慮が必要である。

3. 施工後のポイント

使いはじめて全く問題がなければ良いのですが、計画段階での誤りや見落とし、施工段階での使い勝手の確認不足、身体状況の変化などの理由により、使いにくいこともあります。問題の発生原因を明確にして追加工事を誰が負担するのかを決定します。

- ① 工事の終了時には高齢者本人とその家族に改修した各部位を確認してもらう。
- ② ただ見て軽く触れる程度の確認ではなく、実際に使用してもらって使い勝手を確認してもらう。

6 事業の成果について

連携の重要性

今までの多くは、「住宅に人を合わせる」というあきらめや我慢でした。また改修するといった場合、住まい手と施工者のみでの話し合いで行われることが殆どでした。これからは、「現在の身体機能の状態に家を合わせる」という発想が必要です。

そのためには、建築、医療、福祉の専門家の多くの方が改修に関わることが大切です。一人の考え方には限界があり、また、一人ひとりそれぞれの職種の専門家であっても、すべてに精通することは無理であり、チームとしてお互いが意見交換し、理解し合うことで初めて、その家族にあったより良い工夫が生まれ専門家の良さが発揮されます。そして、これら多職種をコーディネートしていく取りまとめ役が不可欠になります。

実際にはまだチームとしての連携が不十分であったり、地域で活躍する専門家が極端に少ないこと、連携に消極的な専門家も少なくないこと、取りまとめ役リーダーが育っていないことなどがあり、専門家のつながりなどのネットワーク化は今後の課題となりました。

住宅改修にあたり専門家が関わり合うことによって、改修内容の質の確保、改修効果の確保、少額の工事費で最大限の効果を発揮できる、その後のフォローの確保ができるなどあらためて検証することができました。

住宅改修の効果

- ・高齢者の日常生活動作能力の維持
これまで自分でできていた行為を引き続き行うことができる。
- ・介護者の介護負担の軽減
直接介助が必要であった動作が自立になり、それにより介護負担、精神的負担の軽減も図られる。
- ・要介護者等の身体状況改善と精神的状況改善
介護時の身体的な負担の軽減ができる。介護者に過重な負担をかけずにすむため、介護される側にとっても介護時の精神的な負担の軽減ができる。

一度改修すれば生涯それでいいということはありません。加齢や障害の変化に対応して、必要な部分を効果的に改修していくということも必要です。また、住宅改修は居ながらの工事となるため、いつもの環境と変わり体調を崩したり、精神的にも情緒不安定になることもあり気苦労しないよう最善の配慮をすることもチームの役割であり大切なことです。

専門家はニーズを発見した時、住宅改修の必要性を認識してもらうための働きかけや説明することも役割になります。

今後の住宅改修支援仕組みの検討イメージ（参考）

この事業の委員会での意見や10例の改修を通して、今後のバリアフリー改修推進の方策について検討していく内容のイメージです。

